



リセットと後悔

不妊と不倫

仲間由紀恵

夫・田中哲司(51)は変装して超有名ヘアスタイリストと!

仰天告 泰葉(56) 私は小朝(62)に逆さ吊りにされ食パンを...

6月22日号

特別定価 400円

必読レポート

3年目の涙

天皇派 VS 安倍派 宮内庁も 村度バトル

撮ったフジテレビ

山崎夕貴(29)

小栗旬(29) 芸人とお泊まり

息子(30) 逮捕で橋爪功(75) 活動自粛する必要がどこにあるのか?

高安(27) 元AKB(48) 加(28) がつぶり四つ愛はガチか?

毎日新聞の大問題報道「天皇は祈っているだけでよい」の内幕

独占インタビュー

舛添知事の妻・雅美さん(53)

日本一セコい男を夫にもつ

上智大生 殺人放火 異能の主婦の枕元 犯人は女装いたイラスト

美しい男は何を考える? ティーン・フジオカ(36)

パンを焼くだけじゃもったいない 活用術 オーブトースター

らっきょう、ケチャップにみそ カンタン 自家製レシビ

大調査 色は? 柄は? 素材は? みんなのブラジャー

ロンドンで続発! 日本へのテロが狙われる!

激自高須克弥(72) あの裁判「あの俳優」にラブラブ生活 ゆうこりん(33) vs 千秋(45) 化粧するかしらないかどこまでするか 大激論

50代こそ最も貯金できる時はホント?

マイルANA VS JAL 貯め方・使い方

なんと850万人

食料難民を見捨てない!

枝豆は塩ゆでより 蒸し焼きが栄養ロス かわさない調理法

777国スペシャル 山田YEMO(10) ヤマダを通りすぎた芸能人たち

こっちがホント! 浅田

真央(26) フランス人モデル(27)と

初めての恋も 残念彼は...

新ボス誕生!?

井川遥(40) 篠原涼子(43)と

ママ友胸の内

愛は今日もノンストップ

食料難民を るな!



飽食の時代と呼ばれて久しい。若者はコンビニ弁当で食事を済ませ、ファミレスやファストフード店に行けば連日家族連れで賑わっている。だが、それは物事の一面でしかない。全国各地で今、食料供給から取り残された高齢者が激増していた。過疎化で地元スーパーが消え、大型店の出店攻勢で商店街がシャッター通りに。孤立した住人は食料品を隣町のスーパーに求めるが、移動手段を持たない高齢者は買い物ができず、餓死の危機にさらされている。過酷な食の砂漠地帯であえぐ“難民”を救うのは、果たして……。山梨県の限界集落を走る1台の軽トラックに、人の優しさと日本の買い物事情の未来を見た。

全国

850万人の 見捨て

超高齢化と過疎化で、食の砂漠地帯が急拡大。

スーパーがない。足腰が弱って山から下りられない。

「わしら食うもんどどうすんだっての……」

へよきによきにんにん
あまくてながい にんじんだ
より カロチン ビタミンほ
うふだより」

定番の音楽が遠くから聞こ
えてくる。合わせて広場に集
まってきた集落の住人。
数は8人。

「わしら、みんなこれを楽し
みに待ってるの。今日は久々
にかまぼこ買おうって。ジジ
も家で楽しみにしてる」
遠くを見ながら語るののは、
田口愛子さん（82才・仮名）。
ジャージーのズボンにカーデ
イガン姿。右手に買い物袋を
提げている。腰が曲がり、一
歩一歩、地面を確かめるよう



に歩く。

屋根のスピーカーから音楽
を流し、坂道を越えてやって
きたのは、1台の軽トラック
だった。

広場で停車し、後ろ扉を跳
ね上げる。現れたのは即席の
陳列棚。

とびうお240円、あじ2
90円、ほたるいか150円
鮮魚に加え、肉、菓子パン、
かまぼこ、さつま揚げ、総菜
など、食料品が並ぶ。

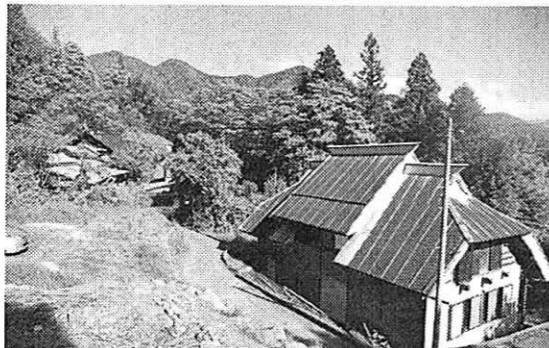
「さつま揚げもいっこくれ
ろ」「まぐろも色がええで、
ばっちゃん、これ」
しゃがれた声が弾み、広場
が賑わう。

山梨県西八代
郡市川三郷町。
人口1万650
9人、うち65才
以上は5762
人。
高齢化率が35
%を超えた山あ
いのこの町で、
住人の暮らしを
支えるのは、1
台の移動式スー
パーだった。
車の主は、同
町大塚地区でス
ーパーを営む星
野商店の2代目
山梨県の市川三郷町
で移動式スーパーを
営む星野商店。

始めたんです。もちろん、地
域のために役立ちたいという
気持ちも強かったです」
そう話す星野さんは、耳に
ピアス、サイドを刈り上げた
髪形にあごひげという今風の

若者。物腰は柔らかく、笑顔
が清々しい。

一日の作業開始は朝7時。
両親とともに、移動販売用の
軽トラックの冷蔵庫に食料品
を詰め込む。品数は計500



買い物難民となった集落の住人のために町内を回る店主の星野さん（上写真左）。品物は鮮魚から肉類、飲み物まで500品物以上。このトラックが地域の高齢者たちの救いとなっている。

店主、星野賀史さん（36才）。
「ほくらが小さい頃は小学校
も数百人いたけど、今では全
校生徒で数十人。人が減って、
店もなくなつて、寂しくなり
ました。高齢者の中には、車
の免許もなく買い物に行けな
い人も多いので……。こうし
て食料品を詰めて回ってるん
です」（星野さん）

東京のど真ん中で、独居老人が スーパーにたどり着けず栄養失調に

徒歩圏に店がなく、毎日の
暮らしに必要な生鮮食料品を
買うことが困難な地域を「フ
ードデザート」（食の砂漠地
帯）と呼ぶ。
日本でのこの「砂漠」が姿を
現したのは、今から10年ほど
前のことだった。
過疎化と景気悪化で地方の
中小スーパーが続々と撤退。
地域内で食料品を買うことが
できない「買い物難民」が大
量に発生した。
「買い物難民」をなくせ！
（中公新書ラクレ）の著者で
帯広畜産大学教授の杉田聡さ
んは、「最大の要因は大規模
小売店舗立地法の成立にあ
る」と指摘する。
「00年に成立したこの法律は、
いわば大型スーパーの出店を
事実上無制限に許すものでし
た。地方都市に大型店が続々

過疎化で町からスーパーが
消え、近くに買い物ができる
場がなくなった。
だが、足腰の弱った高齢者
は遠方の店までたどり着けな
い。市場原理によって見捨て
られた住人のために、星野さ
んは店なき集落に自ら赴き、
食料販売の場を提供していた。
「この辺りはコンビニもねえ
と進出し、それまで地域住民
が頼った商店街がシャッター
通りになり、地元スーパーが
どんどんつぶれていった。
その後、大型店同士の競争
が激化すると、今度は負けた
大型店の撤退が相次いでフー
ドデザートが拡大した。結果
交通手段を持たない高齢者が
食の砂漠に取り残されて、難
民化、したんです」
農水省の推定によれば、現
在、家から500m内に商店
がない買い物難民は全国に約
850万人。高齢化と共にそ
の数は増え続け、30年までに
1000万人を超えると予想
される。
フードデザートは地方のみ
ならず都市にも広がっている。
一例が東京・板橋区の高島
平団地。総戸数1万戸、国内
最大規模の団地は今、65才以

から。体力も落つこちで、山
を下りることもできないの。
食料どうするんだっての。こ
の車が来ねえと、わしら死ん
じまうんです」
かまぼこを買った田口さん
の言葉に、感謝と嘆息が交じ
り合う。
「買い物難民」の現実がここ
にあった。
上の高齢者比率が4割を超え
た。大型スーパーに顧客を奪
われ、近くの個人商店が続々
閉店。車がなく足腰の弱い高
齢者が買い物難民と化し、区
も解決策に苦慮している。
東京のど真ん中、新宿区で
さえるこの問題から逃れられな
い。現在、同区の高齢者の独
居率は45%超。体の不自由な
独居老人がスーパーに行けず、
栄養失調にあえいでいる。
列島を襲う「食の砂漠化」
を直視するため、本誌は5月
末のある週末、先述の山梨県
市川三郷町で星野商店の「移
動販売」に密着した。
「父の代からまぐろの刺身を
売りにして小さな商店を営ん
でいたけど、高齢化で町の人
口が減少して売り上げが落ち
ました。それで、攻めの商売
として3年前から移動販売を

品目超。詰め終わる頃には口
時半を回る。
助手席に小型のレジを置き
て、出発進行。車の屋根に据
え付けたスピーカーが陽気な
歌を奏でるなか、深い緑に開

まれた山あいの細い道を縫う
ように走る。
同地域は標高1600mの
山々を見上げる場所があり、
山の裾野に続く斜面にへばり
つくように集落が点在する。

かつては養蚕業で
栄えたが現在は廃れ
蚕を飼う家はほとん
どない。

最初に向かったの
は同町大塚地区。林
泉寺という古刹を中
心にした集落で、漆
喰がはがれ落ちて土
壁があらわになった
家が目立つ。

広場に車を止める
と、ばらばらと住民
が集まってきた。
「全員が常連さん」
（星野さん）という
顔なじみで、彼を囲
んで楽しそうにおし
やべりする。

「利用してくれる人
の顔と名前はほぼ一
致します。一日誰と
もしゃべらずにいて
ほくの車が来ると家
から出てきて、そこ
で初めて口をきく人
も結構いるんです」
（星野さん）
常連客の1人、武

田すみさん（82才・仮名）は、
3年前に夫に先立たれて一人
暮らし。いつもナイロンの買
い物袋を手に現れる彼女は、
移動販売を心待ちにしている。
「あの音楽を聞くと心がウキ
ウキしてくるんだよ。昔はお
じいさんの運転する車に乗せ
てもらって買い物したけど、
今は星野さんだけが頼りでね。
年金生活だからたくさんは買
えないけど、甘いものやお刺
身を少しずつ買おうら。
おじいさんがいた頃は家で
おしゃべりできたけど、今は
ひとりだから、ここで近所
とお話できて楽しいねえ。
家に戻ったら仏壇に置いてあ
るおじいさんの写真に。今日
は星野さんの店で買い物をし
たよ。って報告するぞら」（武
田さん）
武田さんは月に1度、町の
コミュニティバスで病院に
行って血圧の薬をもらう。
「それ以外の置き薬は富士薬
品の人が年に何回か来てくれ
て、薬箱にないものを補充し
てくれるんだ。
冬は冷たくて指があかぎれ
になるから助かるよお」（武
田さん）
食料は星野商店、薬は富士
薬品。2つの支えで武田さん
の生活は成り立っている。
この日、武田さんはまぐろ
の刺身とクリームパン、ヨー
グルトを買って帰路に着いた。

限界集落に客が2人。 買い物で互いの安否を確認し合う

次の目的地は同町上野地区。新興住宅地だけに客のなかには40、50代とおぼしき若者の姿もちらほら見える。

「車で5分」の場所に中規模のスーパーが存在するが、徒歩で行くと40分以上かかる。車を運転できない一人暮らしの高齢者では、到底たどり着けない。

同地域の住人に追い打ちをかけたのは、コンビニの撤退だった。

住人の1人、荒井みき枝さん（76才・仮名）が言う。

「5年ぐれえ前にできたセブンイレブンが年寄りの集会場になってたんだ。行けば誰かいるから、店で買ったコーヒを飲みながら顔を合わせて、互いの安否を確認してよ（笑い）。銀行に行かなくてもお金が下ろせて公共料金も払えるから、そら便利だったあ。でもコンビニが3月いっぱい撤退しちまって、本当に困ってるんだ」

地方ではコンビニが地域住民の買い物や交流の場となるが、採算重視のため撤退の判断も早い。

最後に向かったのは、同町四尾連地区。標高850mの

山頂にある四尾連湖を囲む地域である。

山の麓から曲がりくねった山道を進むと、20分ほどで頂上近くの公民館にたどり着く。眼下には斜面に沿って枝分かれした細い道が広がり、十数軒の古民家が小さな集落を形成する。だが、空き家も多い。まぎれもない「限界集落」がここにある。

公民館の前で星野さんを待つのは、同地区に住む山田紀子さん（81才・仮名）と野本一恵さん（88才・仮名）の2人だけ。

「東京からよう来たねえ」と、本誌記者を温かく迎えたのは、もんべとかつぼう着に身を包んだ野本さんだった。

15才で四尾連地区に嫁いできた彼女は、今では子供が3人、孫が6人いる。

この地に愛着を持ち、夫の死後も一人暮らしを続ける。「今も3か月に1度、自分で軽自動車運転して町立病院に行くけど、怖くて仕方ない。山道では時速15kmくらいでゆっくり走るんよ。米寿のお祝いを町にしてもらった時に免許を返そうかと思っただけ、やっぱりこれが

ないと不便だからねえ。買い物はすべて星野さんの移動販売で賄ってるから、本当にありがたいです」（野本さん）

山田さんが、彼女の言葉にうなずく。

「私あ、車の運転ができんから。買い物は全部星野さんに頼っているの。あの人に来てくれんかったら全然ダメ。こんなとこに住んでるから、一日誰とも口きかない日もある。でも週に1度、木曜日は雨が降っても必ず星野さんが来て

くれるから。そこで野本のおばさんと会って話すんだよ。そうやって無事を確認してるんだ（笑い）」

星野さんは同町内を1日に平均18か所訪問する。楽な仕事ではないが、大手の運送会社を脱サラして家業を継いだ彼にとつて、日々の充実感はない。えがたい。

「毎日の売り上げは7万〜8万円で、収支はギリギリ。でも移動販売を始め前よりはもうかっています。ます」（星野さん）

日常の訪問販売業務が そのまま「見守り活動」に直結している

買い物難民を救おうと奮闘する事業者は全国にいる。

その先駆けが、全国36都道府県で移動販売サービスの展開する「とくし丸」である。

12年に同社を起業した代表取締役の住友達也さんが語る。「そもそもは徳島県の過疎地に住む両親が買い物難民化したことが起業アイデアのきっかけです。無論、社会貢献目的だけでなく、ビジネスとしても大きな可能性を感じたから始めました」

「とくし丸」では、本部と契約した販売員（ドライバー）が提携先の地元スーパーから調達した商品を自前の軽トラックに積み込み、地域住民の軒先まで訪ねて販売する。

最大の特徴は、客との玄関先の会話にある。ドライバーは対象エリアの民家を訪問して、「買い物に困っていませんか」と声をかける。その人の好みやニーズを探り、求めに応じて週2回訪問する。いわば、御用聞きに近い。

「われわれは、売ればいいのではなくお客さんに喜んでもらうことが大切なので、これ買いませんか、などのセールストークは禁止です。食品が余って捨てられることがないように、お客さんが欲しいと言つても、売り止め、することもあります」（住友さん）

昨今は配偶者に先立たれた単身の高齢者が増えるなか、商店が訪問を繰り返すことのが見守り役ですが、住人の中には見守りを嫌がるかたがいます。また、地域で孤立している人ほど見守り役を嫌う傾向があります。

でも、ほくらはモノを売ることが本来の目的なので、嫌がられない。日常業務がそのまま見守り活動になるんです」（住友さん）

移動中、真夏の炎天下で倒れていた高齢者を発見したり、顧客の自宅で振り込め詐欺の電話に遭遇して通報したこともあるという。

高齢化社会で移動販売の果たす役割はますます拡大すると住友さんは語る。「団塊の世代の多くが70才前後なので、移動販売ビジネスは今後15年間伸び続けるでしょう。今「とくし丸」は全国で210台ほど走っています。1000台までは増えると考えています。買い物難民は全国どこでも避けられない問題ですからね」

移動販売以外でも、買い物難民救済の網の目は広がる。

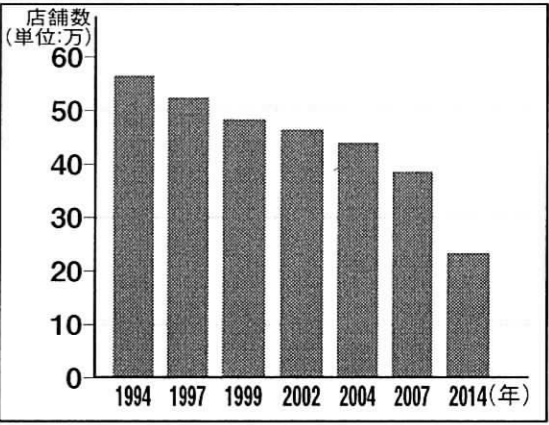
山あいの過疎地でドローンを使った宅配サービスも

生鮮品販売店舗までの距離が 500m以上の人口割合（市町村別）

農林水産政策研究所食料品アクセスマップより



全国の飲食料品店の店舗数推移



経済産業省調べ